

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 5日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530731

研究課題名（和文） 妊娠・出産にリスクのある夫婦の抑うつに関する縦断的研究

研究課題名（英文） Longitudinal Study of high perinatal risk parents' depression.

研究代表者

安藤 智子（ANDO SATOKO）

筑波大学・人間系・准教授

研究者番号：90461821

研究成果の概要（和文）：妊娠中から産後5週、3カ月、6カ月、1年の5回の調査を、夫婦それぞれに対して実施した。低出生体重児の両親は、他の親に比して抑うつの得点が高く、また、父親の抑うつは、母親よりも低い傾向にあった。子どもが低出生体重児であることは、特に母親の育児への否定的な感情や否定的な養育態度に影響しており、それは、父親の家事や育児への参加によって媒介される可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：This study longitudinally examined a depression of mothers' and fathers' and the relationship of each other from antenatal period to one year after birth. The depression score is higher when parents have low-birth-weight baby. Father's depression score is lower than mothers. Mothers who has low-birth-weight baby feel more difficulties and anxiety to take care of children and has negative emotion to the baby. Fathers' help to keep the home and to take care of their children mediate mothers' negative feeling about child rearing.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総 計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：妊娠期、親子関係、抑うつ、夫婦関係、養育態度、縦断研究

1. 研究開始当初の背景

（1）母親の産後の抑うつは、母親の養育態度や子どもの心身の発達に影響について、国内外で多くの研究がなされてきた（たとえば Murray, 1992）。しかし、出産後の父親の抑うつについては、まだ十分に検討されていない。Goodman(2004)のレビュー研究によれば、産後3日から1年の間に父親が抑うつになる割合は1.2%～25.5%で、母親が抑うつの場合

合には25%～50%であった。夫婦の抑うつと夫婦間葛藤は相互に関連しており(Beach, Smith & Katz, 1994)、子どもへの養育行動(Holden & Miller, 1999)や愛着(Cox & Owen, 1993)との関係も指摘されている。パートナーが抑うつであれば、それを補うために家事や育児の仕事を肩代わりしたり、パートナーへの配慮で疲弊し共倒れになる恐れもある。その場合は、子どもへの影響がより

深刻であることが推測される。

(2) 不適切な養育に関与する周産期におけるリスクとして、養育者の精神科既往や、長期の入院、子どもが低出生体重児や早産、多胎児であることなどがあげられる。胎生 30 週といった早い時期に生まれた乳児は、外界への働きが微弱であり、養育者との相互作用が難しい傾向にある。また、多胎児の妊娠では、早産防止のために入院する妊婦が 80% を超え、そのうち安静時のつらさを訴える者が半数おり、なかには妊娠期の継続自体に否定的になる妊婦もいる(堀内, 2002)。出産後も子どもだけ他院へ搬送されたり、多胎児が別々の病院に収容されることもある。このような子どもの入院のための親子分離や、子どもの疾病やしょう害、発達の遅れなど、養育上のリスクをもつことがある。子どもへの不適切な養育のリスク要因として多胎児や低出生体重児があげられるのは、このような子どもの発達上のリスクと、養育者の負担の多さと関係するだろう。これらのリスクが、どのような要因で緩和されるかについて、縦断的に計画された研究で検証していく必要があると考えられる。

2. 研究の目的

(1) 父親の産後の抑うつ割合とその推移を明らかにし、そのパートナーである母親の抑うつや夫婦関係の葛藤、子どもへの養育態度との関連を検討する。

(2) 産後の抑うつに影響することが予測される、周産期の長期入院や心身の合併症などの母親の心身のリスクや、子どもの出生時の状況、出生体重など養育に関する要因を加えて父親、母親の抑うつ割合や、抑うつに寄与する要因、緩和要因について検討する。

(3) 周産期センターにおけるスクリーニング及びフォローアップ等の介入の効果について検討する。

3. 研究の方法

(1) 調査協力者

A 医療センター総合周産期母子医療センター産科外来での妊婦健診時に、妊娠 24 週を超えた妊婦とそのパートナーに対して妊娠中、産後 5 週、3 ヶ月、6 ヶ月、1 年に郵送による質問紙調査への協力を依頼した。1 年半かけて、妊婦 790 名、そのパートナー 580 名の協力を得た。出産したことを確認し、子どもの週数が 5 週、3 ヶ月、6 ヶ月、1 年になるのに合わせて郵送で調査票を送付した。それぞれの時期に返信を得られたのは、母親が 493 名 (65.4%)、452 名 (57.2%)、413 名 (52.3%)、317 名 (40.1%)、父親が 420 名 (72.4%)、387 名 (66.7%)、315 名 (54.3%)、239 名 (30.3%) であった。2500g 未満の低出生体重児、双胎児、精神科既往のある母親のいる家族はそれぞ

れ 90 家族 (11.4%)、93 家族 (12.4%)、25 家族 (3.1%) であった。また、低出生体重児はすべて双胎児であった。これは、出産直後の新生児の状態にリスクのある妊婦は、主治医との相談で、調査協力をしなかったためと推測される。

(2) 調査内容

本調査で用いた主な項目は次の内容である。

① エジンバラ産後うつ病質問票 (Edinburgh Postnatal Depression Scale: EPDS)

Cox, Holden & Sagovsky (1987) が開発し、岡野ら (1996) が日本語版を作成した。EPDS は、保健師の家庭訪問、新生児訪問などでも活用されるようになってきており、産後うつ病をスクリーニングする際にも用いられている。過去 7 日間を振り返って「笑うことができたし、物事のおかしい面もわかった」など 10 項目からなる自記式調査票であり、0-3 点の 4 件法で採点される。得点範囲は 0-30 点で、抑うつが高いほど高い値になる。8 点/9 点の区分点が推奨されているので、本研究でもそれにならう。5 回すべての調査で用いた。

② 自尊感情尺度

Rosenberg の自尊感情尺度を翻訳した山本・松井・山成 (1982) の日本語版から「少なくとも人並みには価値のある人間である」「自分には自慢できるところがあまりない」等 5 項目を使用し、1. 「あてはまらない」～5. 「あてはまる」の 5 件法で質問した。加算して自尊感情得点とした。得点範囲は合計 5-25 点となり、得点が高いほど自尊感情が高い。妊娠中の調査で用いた。

③ 夫婦関係の良好さを問う項目

Marital Love Scale (菅原・詫摩, 1997) から「どんなことがあっても夫のみかたでいたい」等 5 項目を選び、1. 「全くそう思わない」～5. 「とてもそう思う」の 5 件法で質問した。5 項目の合計を夫婦関係得点として用いた。得点範囲は 5-25 点となり得点が高いほど夫に対する親密感が高い。5 回のすべての調査で用いた。

④ 家事分担についての項目

母親に対しては、「部屋のそうじ」「料理」等 4 項目をパートナーや家族がどの程度分担しているかを、父親に対しては自分がどの程度分担しているかを 1. 「ぜんぜんない」～5. 「よくある」の 5 件法でたずねた。得点範囲は 4-16 点となり得点が高いほどパートナーや親族の家事分担がなされていることになる。産後の 4 回の調査で用いた。

⑤ 育児分担に関する項目

「子どもをお風呂に入れる」「おむつを替える」等 5 項目を 1. 「ぜんぜんない」～5. 「よくある」の 5 件法で質問した。5 項目を加算し育児分担得点として分析に用いた。得点範

囲は 5-25 点であり、高い方がより育児をになっている。産後の 4 回の調査で用いた。ただし、子どもが入院中の場合は回答しないよう配慮をした。

⑥育児不安に関する項目：住田・中田（1999）の育児不安尺度を荒牧・無藤（2008）が確認的因子分析を用いて解析した「育児への負担感」「育て方/育ちへの不安感」「肯定感」の項目を修正して用いた。「子どもを育てるのは楽しいと感じる」「子どもがわずらわしくていらなくなる」「育児でどうしてもよいかわからなくなる」等 9 項目を 1.「まったくあてはまらない」～5.「よくあてはまる」の 4 件法でたずねた。主因子法プロマックス回転で固有値 1.2 以上の因子を抽出する因子分析の結果、荒牧・無藤（2008）と同様の 3 因子が確認されたため、それぞれ育児肯定感得点、育児負担感得点、発達不安感得点とした。各得点の得点範囲は 3-12 点で高い方がそれぞれの特性を有していることになる。産後の 4 回の測定に用いた。

⑦養育態度に関する項目：養育に関して徳永ら（2000）の尺度を参考に、肯定的な養育態度として「抱っこしてあやす」等 3 項目を、否定的な養育態度として「泣いても放っておく」等 4 項目を作成し、1.「ぜんぜんない」～5.「よくある」の 5 件法でたずねた。肯定的な養育態度と否定的な養育態度それぞれの合計点を肯定的養育態度得点、否定的養育態度得点とした。得点範囲は、肯定的な養育態度が 3-15 点、否定的な養育態度は 4-20 点で、値が高い方が、それぞれの養育に対する特徴的な態度を有している。産後の 4 回の調査でたずねた。

⑧就労に関する項目：オリジナルに作成した職場環境についての 10 項目を作成した。主因子法プロマックス回転による因子分析を行い父母ともに、3 因子抽出された。その結果、第 1 因子は、「失業の不安がある」「身分が不安定だ」などの身分の不安を示す 4 項目から成っており「雇用への不安」と命名した。第 2 因子は、「家庭のことに對して上司や同僚からの理解がある」「家庭の事情で仕事ができないとき、職場でサポートが得られる」など、家庭への理解を示す 3 項目からなるので「家庭への理解」と命名した。第 3 因子は、「有給休暇を取るのに、周囲に気兼ねする」「個人的な都合で早く帰ろうとしても、帰りにくい雰囲気がある」など、気兼ねをしたり自由でない雰囲気などを示す項目からなるので「周囲への気兼ね」と命名した。なお、父親では「勤務時間外にも仕事がらみの人間関係にしばられる」がいずれにも該当しなかったが、母親の結果は職場風土に分類され、意味の上からも職場風土に関連した内容であるとするのが妥当であること、また父親を対象とした別の先行研究（福丸ら、2006）からも

同様の結果が得られていることから、父親においても「周囲への気兼ね」の項目として残すこととした。

その他年齢、性別、家族構成、成人版愛着スタイル尺度、抑うつへの脆弱性の特性を問う項目、ソーシャル・サポートに関する項目、乳児の行動特性に関する項目、就労形態、教育経験等についてたずねた。

4. 研究成果

（1）母親父親の抑うつ

母親、父親ともに低出生体重児父親の抑うつの得点は、母親と比して低く、低出生体重児、あるいは多胎児である方が、抑うつ得点が高かった。母親の精神科既往の有無では、5 回をすべて回答した人数は母親が 4 名と少なく、統計的な分析は行えなかった。

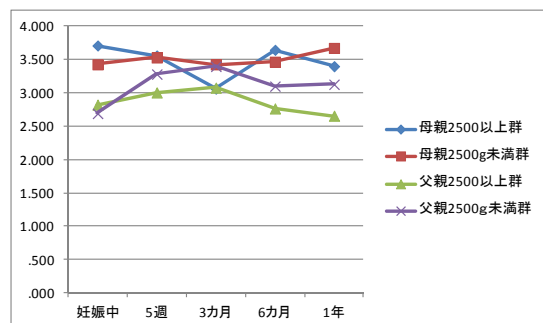


図1 子どもの出生体重別両親の抑うつ得点の推移

（2）母親と父親の抑うつの割合

母親の抑うつの割合は、妊娠中、産後 5 週、3 カ月、6 カ月、1 年で、19.1%、10.8%、6.9%、8.1%、8.5%であった。また、父親は、7.7%、8.6%、8.4%、6.8%、4.6%であった。

うつ得点が、区分点を越えた群を抑うつ群、区分点を越えなかった群を非抑うつ群として、母親と父親の抑うつ 2 群でカイ二乗検定を行った。その結果、妊娠中、5 週、3 カ月では、母親が抑うつ群の父親の抑うつ群の割合が、母親が非抑うつ群における父親の抑うつ群と比して高い割合であった。母親と父親の抑うつは特に、妊娠中から産後早期において相互に影響している可能性が示唆された。

（3）母親と父親の抑うつ得点の相関の検討

子どもの出生体重が 2500g 以上と未満の 2 群で、母親と父親の抑うつ得点の相関分析を行った。その結果、2500g 以上群では、妊娠中、5 週、3 カ月とそれぞれ $r=.16^{**}$ 、 $.29^{**}$ 、 $.14^{*}$ で有意であった。一方、2500g 未満の子どもの両親では、3 カ月のみ $r=.41^{**}$ の有意な相関が認められた。また、母親の抑うつの高い群と低い群に分けた相関分析では、低い群の方で、有意な相関が妊娠中から産後 1 年にかけて認められた。抑うつの割合についての検討

と同様に、相関分析においても、両親の抑うつは、妊娠中から相互の関係性が認められた。また、子どもの出生体重や、夫婦それぞれの抑うつ得点の高さなどで分けて検討すると、その相互の関係性に違いが認められた。

(4) 母親、父親と子どもの出生体重による比較

母親と父親を比較すると、抑うつ得点は母親の方が高く、子どもへの否定的な養育態度も肯定的な養育態度も、母親の方が高い傾向が認められた。子どもが低出生体重である父親には、一部の時期で母親と同様に、高い肯定的な養育態度や否定的な養育態度が認められた。父親が家事や育児に関わっているという母親からの評価や父親自身の評価も低出生体重児の父親の方がよく関わっていると評価される傾向にあった。合わせて考えると、子どもとより関わっている父親の方が、母親と同様に推移しており、子育てについて母親と近い経験をしているか、あるいは、養育に関する評価が母親と似ている可能性が示唆された。

(5) 夫婦の関係性の推移

夫婦関係の良好さは、産後時間が経つにつれて、母親の父親との関係についての評価が下がり続けた。この変化は、特に子どもが低出生体重児である母親で大きく、子育ての負担と夫婦関係の関連が示唆された。

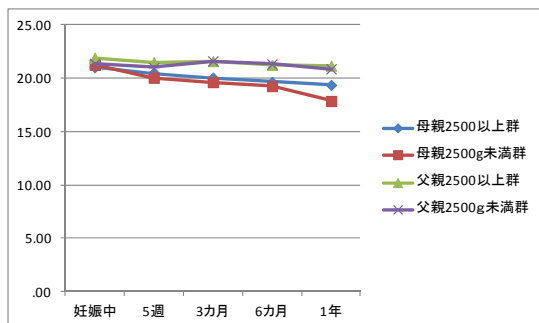


図2 子どもの出生体重別夫婦関係の良好さの推移

(6) 父親や家族の家事・育児への参加の影響

母親の育児感情は、低出生体重児をもつ方が高い傾向にあったが、父親や家族の家事・育児への参加をコントロールすると、これらの出生体重による差はなくなった。つまり、養育に関する負担が高い低出生体重児の養育についても、家族の支援によって緩和される可能性が示唆された。

(7) 抑うつを予測する要因

母親の抑うつを予測する要因は、母親の自尊感情や、子どもの育て方、育ちへの不安と、父親の子どもの育ちへの不安が影響してい

た。一方、父親の抑うつには、父親の自尊感情と、父親の育て方への不安感が寄与していた。特に父親の抑うつに強い影響をもっていたのは職場環境要因で、特に「雇用への不安」であった。「雇用への不安」は、母親の抑うつにも寄与しており、周産期や育児への感情や態度に加えて、家庭の社会経済的要因も抑うつに影響を与えていることが示唆された。

(8) 本研究の意義と今後の課題

母親と父親をペアデータとして産後1年までに5回の追跡調査したことで、産後の家族の様相を明らかにするための詳細なデータを得ることができた。父親の測定を加えたことで、産後の抑うつに関する研究や育児不安や不適切な養育に関する研究に、父親の変数を加えた視点を提供することができたといえる。

父親の産後抑うつの割合を明らかにし、母親の抑うつとの相関関係が認められたこと、母親の抑うつには、父親や家族のサポートが影響していることが示唆されたことなどの析結果から、母親の抑うつを、家族全体の変数から説明する視点を提供できた。また、特に養育者の負担が高い低出生体重児や双胎児の両親の特徴を抽出することができ、不適切な養育の予防にいかすための基礎的な知見にすることができる。

今後は、周産期のリスクが両親の抑うつや養育態度にどのような変数を媒介にして影響するのか等について、多変量、かつ時系列の詳細な分析を加える予定である。夫婦関係や夫婦外のサポートの有無、職場の環境などの家庭外の要因や、子どもの気質や行動特性の関与、両親の被養育体験の影響などを総合的に分析する予定である。

更に、母子、父子の相互作用を観察し、子どもの社会的相互作用や、行動特徴に、今回測定した変数がどの程度の影響力を有しているのかを検討したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

- ① 安藤智子 周産期のメンタルヘルス. 母性衛生, 第53巻, 1号, 学8-学14頁, 2012 (学会依頼論文、査読無)
- ② 安藤智子 周産期における喪失の理解と対応. 母性衛生, 第53巻, 2号, 学8-学15頁, 査読無, 2012
- ③ 福丸由佳 子育て支援ネットワークと家族のつながり合う力. 家族心理学年報. 30号, 日本家族心理学会編集, 95-105頁, 査読有, 2012

〔学会発表〕(計 12 件)

- ① 安藤智子・菅沼真樹・福丸由佳・無藤隆：
「妊娠・出産にリスクのある妊婦とそのパートナーの抑うつ」日本発達心理学会第24回大会(明治学院大学, 東京都), 2012年3月
- ② 安藤智子・菅沼真樹・内赤さやか・福丸由佳・松本幸子・斉藤正博・高木健次郎・馬場一憲・無藤隆・関博之：「総合周産期母子医療センターで出産した夫婦の抑うつについて：妊娠期からの縦断調査3」日本母性衛生学会第52回大会(京都国際会議場, 京都府), 2011年9月
- ③ 安藤智子・小林未果・菅沼真樹・内赤さやか・高木健次郎・斉藤正博・馬場一憲・無藤隆・関博之：「総合周産期母子医療センターで出産した夫婦の抑うつについて：妊娠期からの縦断調査2」日本母性衛生学会第51回大会(石川県立能楽堂, 石川県), 2010年11月

〔図書〕(計 14 件)

- ① 安藤智子 6章 周産期におけるアタッチメントの理論と実践. 数井みゆき編著「実践におけるアタッチメント」誠信書房, (全 235 頁) 127-151 頁, 2012
- ② 安藤智子 第4章2節 子どもの発達に影響する要因. 第4章4節 親子を支えるカウンセリング. 小田豊監修 丹羽さかの編著『保育の心理学Ⅱ』光生館, (全 164 頁) 134-142, 151-159 頁, 2012
- ③ 安藤智子 第10章 保育相談に求められる姿勢と技法. 福丸由佳・安藤智子・無藤隆編著「保育ライブラリ子どもを知る 保育相談支援」北大路書房, (全 167 頁) 121-132 頁 2011

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安藤 智子 (ANDO SATOKO)
筑波大学・人間系・准教授
研究者番号：90461821

(2) 研究分担者

無藤 隆 (MUTO TAKASHI)
白梅学園大学・子ども学部・教授
研究者番号：40111562
福丸 由佳 (FUKUMARU YUKA)
白梅学園大学 子ども学部 教授)
研究者番号：10334567
菅沼 真樹 (SUGANUMA MAKI)
東海大学・文学部・講師
(H21、H22 のみ)
研究者番号：40453708

(3) 連携研究者

関 博之 (SEKI HIROYUKI)
埼玉医科大学総合医療センター総合周産期母子医療センター・産科・教授
研究者番号：20179328
小林 未果 (KOBAYASHI Mika)
国立精神・神経センター 精神保健研究所 社会精神保健部 流動研究員
研究者番号：50536927